

CLOSEUP

# 岩手力!

## 事業利用企業紹介

### 株式会社 東北ウエノ

物流を陰で支える包装資材。  
時代とともに運ぶモノが変わり、  
それを包むための素材、  
技術も進化する

より安全に、より早く、そして、より安価に…。  
包装資材に求められる要素は多岐にわたり、しかも厳しい。これに応えるのは物流環境を的確に把握し、最も適した原材料を選ぶ「適材適包」の知識・技術とフレキシブルな企画力だ。



発泡ウレタン、エアクッションなど、瞬時に緩衝材をつくる

#### 縁の下の力持ち

「現代社会においては、包装を抜きにして成立する製品はほとんどありません」(日本包装学会のホームページより)。

言われる通り、私たちの身の回りで製品が裸の状態で流通していることはほとんどない。ものによって過剰包装と言われたりもするが、包装のおかげで製品が壊れることなく、ピカピカの新製品として私たちの手元に届くし、包装によって壊れるロスも少なく搬送の手間も省けて、結果として私たちは経済的な恩恵も受けていることになるのだろう。

「しかし皆さん製品は見ても包装は見えてくれません。包装なんて所詮、捨てるものだと。でも我々は包装で産業界を支えていると思っています。『適材適包』が当社の品質環境方針のテーマです」

たとえば、いままで1ケース100個梱包していた製品を、包装資材の素材や形状を工夫して120個梱包できるようにすれば、5ケースで2割増の数を運ぶことができ、1個当たりの輸送費は2割減+資材分のコスト削減になる。と言って、ミチミチ小さく詰め込んで納めるのが大変だし、取り出すのに手間がかかり、かえって時間ロス、コスト高になりかねない。

製品の安全を確保するのと併せて、出荷状況はどうか、荷解き作業はどんな場所ですぐに行われるのか、輸送手段が何で、経路(道路事情)はどうで時間はどうか…。さまざまな要素を勘案し、素材を何にするか、どういう形につくるか。設計し、試作し、製品化する。しかも、できるだけ安価に、さらには送る製品の納期が迫っている場合もあり、対応も早く、現在の物流を陰で支える包装資材会社に求められることは多様にして煩雑だ。

最小限の原材料で最大効果の包装資材を考える





店舗（街の包装屋さん）では一般の人向けにも包装資材をつくる



包む相手を3次元カメラで撮影、その画像データで原材料を加工する

## 「包装専士」という資格

「仏像をつくったので、壊れないように安全に送ってほしいというお客様がいました」

これは一般の人の話だが、機械メーカーでも同じようなケースがあるという。製品、部品の移送の大切さはわかっていても、包装の専門職を置くところまで手が回らないのが実情。その結果、必要以上に包装資材を使ったり、資材の選択が適当でなかったため移送中にトラブルが起きたり、ということがある。

㈱日本包装技術協会が認定する「包装管理士」、「包装専士」という資格がある。「包装管理士」を取得後、一定の条件を満たすと包装のエキスパート「包装専士」の受験が可能になる。現在の日本での有資格者は包装管理士が10,227名、包装専士が約800名いるという。「地味な仕事だけになかなか皆さんにわかってもらえない歯がゆさがあります。いわて産業振興センターさんのご紹介でいろいろな展示会などを通じてお知らせしてはいるのです。が…」

## 進化する包装

同社のかつての親会社（平成8年分離独立）株式会社ウエノシステックは、前身が株式会社上野政次商店。昭和31年、東



精密部品を包む。安全に、簡便に、そしてより多く…

京上野に創業した。日本が戦後復興から高度経済成長に向かう時代、運ばれるのは生活物資が中心で、扱う商品は筵や縄など。緩衝材と言えば木毛やヤシ殻素材のもの。やがて産業の発展に伴い工業製品が動くようになり、包装資材も高性能化。緩衝材に発泡スチロールが現れ、昭和40年には壊れないポリエチレンの発泡材が導入される。運ぶモノは時計、事務機から精密機器、生産工場が地方に分散するようになると生産工場から組立工場へ「部品」が送られた。一方、運送事業の民営化と高速道路網の発達とが相まって民間部門の物流も急拡大。モノをより早く、安全に送るために包装資材もさまざまに研究、開発が進められてきた。その歩みは今もとどまることがない。

「私から見ると、まだまだオーバーパッケージです。包装はもっと簡便になるしコストダウンもできる。省資源という面でももっと効率を追求しなければなりません。包装のカイゼンが必要です。現物を3Dでスキャン、デジタルデータ化し、大幅な時間短縮、正確な緩衝設計が可能な技術が当社にはあります。メーカーさんにはモノづくりに集中していただき、包装については我々にお任せ願いたい」

自ら「包装専士」として包装アカデミー講座で教鞭もとる鈴木社長、「究極の包装」とは、の問いに答えて。「製品を限りなく裸に近い形で運ぶこと。それをどうやって実現するか、これからのテーマです」

## 企業概要

- 創業 1996年4月
- 代表取締役 鈴木 雅彦
- 資本金 1,000万円
- 事業内容 輸送包装改善・緩衝包装设计及び試験の委託・包装資材販売・包装機械類等販売ほか
- 従業員数 9名
- 海外拠点 タイ・中国
- 所在地 一関市地主町3-35 2階  
電話 0191-21-4531

URL  
<http://www.touhokuueno.co.jp>

今月の表紙／東北ウエノの営業組。左から福原勇太さん、田原祐樹さん、小岩良さん。鈴木社長の感化か、全員ダークでビシッと決めている。いずれも地元出身で、高校時代、田原さんはバレーボール、福原さんはサッカー、そして小岩さんは応援団とゲンキ印揃い。「運動系を選んだわけではなく、たまたまそうなった」（鈴木社長）

## 社長プロフィール 鈴木 雅彦

28年生まれ。東京都出身。大手化学メーカーで包装資材の代理店開拓などに携わった後、転身して包装業の第一線に立つ。かつての親会社ウエノシステックの東北地域強化のための一関進出だったが、そこはたまたまメーカー勤務時代に出会った奥さんの郷里。東北ウエノとして分離独立、自身も一関在住18年を経て地場企業として根を下ろす。「実は中学生のとき修学旅行で厳美溪に來たことがあって、運命の糸を感じています…」。高専時代はラガーマン（センター）としてならした。

